

新春 博物館長が語る

市内発見の古墳時代のオニギリ



土浦市立博物館長
上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長 茂木雅博
茨城大学名誉教授

市民の皆さま、新年おめでとうございます。

私は上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長を兼任させて頂き、7回目の新年を迎えることができました。昨年以上高津貝塚で第19回企画展「みんなの知らない植物の世界―適材適所の考古学」を開催し、関東一円の遺跡から出土した植物遺存体や炭化物を展示いたしました。その際、ふるさと歴史の広場の収蔵庫の中から興味深い遺物が発見され、展示いたしました。オニギリ状の炭化物で、1978年秋に土浦市教育委員会が緊急に発掘調査した二丁田台遺跡(木田余)から発見されたものです。この緊急調査を契機に、土浦市教育委員会は3年を費やして市内遺跡の悉皆調査を行い、『土浦の遺跡』(1984年刊行)をまとめました。今日の考古学遺跡の保存・整備体制が確立した記念すべき調査でした。

この遺跡は古墳時代の集落跡で、周辺の都市化によって調査時には大半が失われていましたが、3棟の竪穴式住居跡が東西に等間隔に並んで検出され、中央の2号住居跡からオニギリ状の炭化物が発見されました。

この住居跡は3棟共に6世紀後半の同時期の遺構で、2号住居跡は深さ60センチ、一辺約



▲オニギリ状の炭化物が出土した2号住居跡



▲出土したオニギリ状の炭化物

5メートルの正方形、北西壁の中央に竈を備えた4本柱の竪穴式で、床面には土師器や須恵器が全部で10個程出土しました。住居内には焼土が多く堆積し、建物は廃棄後に焼却されたと想定されました。このため炭化木材が多量に検出され、竈西側の柱穴寄りの南側床面から、ひとつかたまりの炭化物が発見されました。この炭化物は一部に網代状の痕跡が確認され、明らかに蒸された米で、現在はシャーレの中に保管されていますが、大きいもので5センチ×4センチの塊が2個、3.5センチ×2センチの塊が1個、更に2センチ前後の塊が16個程あります。分離した米粒も何点かあり、計測すると縦6ミリ、横2ミリの短粒で丸みを帯びたジャポニカに属する米でした。網代状の痕跡から、網代編みの容器に入れられていたと考えられます。

このような資料は県内でも数カ所で発見されています。最古の例に東海村豊岡宮前遺跡から出土した、5世紀後半のオニギリ状の炭化物があります。このオニギリ状の炭化物は玄米で、調理前の生米の可能性も想定されるそうです。また、ひたちなか市武田西塙遺跡からは平安時代（9世紀後半）のオニギリが木製曲げ物の中から発見されています。東海村の資料が生米であったと見したら、茨城県最古のオニギリは土浦市から発見されたことになるでしょう。

なお、網代痕があるオニギリの例は、横浜市北川表の上遺跡第40号住居跡から発見されています。古墳時代後期のオニギリで、笹を編んだ弁当箱に入っていたと想定されます。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場では、市民の皆さまのご理解と暖かいご支援により、市内の遺跡調査を進めております。今年もどんな歴史を掘り出すか、楽しみです。調査・研究した成果を皆様にご紹介したいと思います。



▲炭化した米粒